

心理学には、その学問的研究の対象である「心」について基本的見解が一致していない立場が並存し混在している。そのことが初学者には、見えにくい。そこに、初学者にとっての一つの大きな障害がある。そこで、最初にそのことを明確に掴んでおくことは、心理学を学ぶに当たって、極めて大事なことである。「心」についての問いは無数にある。「心（こころ）」は、魂、靈魂、精神、心情、感情、情動、意志、知情意、知能、・・・などなどを表す包括的な基本語である。「心」は、「在るのか無いのか」について、意見が分かれる。それは、直ちに、「在る」とは何か、「無い」とは何か、という問いを生む。それは、「わかる」とはどういうことか、という「問い」をも呼び覚ます。「心」は、どのようにして「知ることが出来るのか」あるいは、「知ることが出来ないのか」について、意見が分かれる。「心」は、「物」や「事」と同じようにして「知ることが出来るのか出来ないのか」について意見が分かれる。「物」や「事」については、自然科学の成功がある。それを真似たい誘惑も生まれる。説明、理解、予測が、その目標である。知る対象としての「心」の本質、つまり、物や事とは区別され、「心」であるための必要十分条件について、意見が分かれる。いや、そのような問題を立てるか立てないか、について意見が分かれる。「心」の本質について、相互に区別されうる幾つかの考えがある。「心」の構造について、「意識と前意識」、「意識と気づき」、「意識と無意識」、「意識と超自我とイド」など、相互に異なる幾つもの意見がある。以上の総てを詳細に展開するには、膨大な時間を必要とするであろう。大まかなスケッチに留めるほかない。

「心（こころ）の有無、可知不可知、をめぐってさえ、多種多様な立場がある。

1) 在り、可知。素朴实在論：日常の凡人が、素朴に信じている立場。言葉に表すならば、「こころというものが在って、そのすべてを知ることが出来ないにしても、おおよそはわかるし、それだけわかれば、わかると言って差し支えない。また、それだけわかれば、とりあえずは、生きていくうえで、あまり困らない。それで十分満足だ。」**「素朴实在論」と蔑称される、無知かも知れないが極めて健康な立場。**

2) 不可知。不可知論「よく考えてみると、心など、見たことも聞いたこともない。在るか無いかも、わからない。そんなこと、わかるはずもない。そのようなこと、私には知ることができない。軽々しく、心が在るとか、心をわかることが出来る、などという奴の言葉を信じてはいけない。安易に騙されるな。」

「懐疑論」と「不可知論」（対処のために方策：懐疑論自身を懐疑せよ。不可知論には、不可知なることは、如何にして可知かを問いただせ。）以下には、「自然科学としての心理学」の世界が広がっている。

3) 無い。可知の限定。根源的（急進的）行動主義「心などありはしない。心は無いのだ。見えないもの、誰も見たことのないものを、在ると言うのは、誤りだ。心や魂があるというのは、実は、宗教時代の迷信なのである。科学の時代の今日、在ると言えるのは、見えるもの、観察可能なもの、人間の「行動」のみである。」（例えば、B.J.Watson）(A) 科学は、見えないものではなくて、見えるものを基礎に築かなければならない。そこに限定する。科学以外の分野で、「見えない心」も在ると考えるのは、私には、関係ない。正確、客観的、科学的、実証的、制御と予測（行動科学）(B)「見えない」が在ると言うのは、中世以来の「迷信」だ。科学時代の現代、「迷信」はこの世から追放せよ。（B.J.Watson：行動主義心理学の提唱者）。**論理実証主義の科学哲学。**

4) 無い。構成概念。あるいは、在る、神経活動として在る。**多種多様な新行動主義**

「行動だけで、行動をわかってしまうと、実は、たいへん難しい。つまり、外的行動の研究だけで、外的行動を予測し制御する法則を明らかにすることは、難しい。そこで、見えないのだが、「内的行動」というものを考えよう。」**根源的行動主義の妥協的修正版。やはり、論理実証主義。**

(A)「内的行動」を、外的行動を説明するための便宜的な「構成概念」(Constructs)として説明し、それによって、理解することも出来る。」あるいは、(B)「『内的行動』は、脳の出来事・活動である」、と考えることもある。あるいは、(C)「『内的行動』は、「外的行動」が、内化(心内化)したもの」と考えることもある。あるいは、(D)「『内的行動』(例えば、思考活動)は、言語行動の内化したもの」と考えるものもある。Tolman, Skinner, マウラー、オスグッド、バンデューラ、・・・。

5) 在る。可知。脳生理学、大脳生理学。高次神経活動の生理学。「心とは脳の働きなのだ。脳が無くては、心などありえない。だから、心は脳の働きだと言える。」つまり、「心は、脳の働きとして在るのだ。」生理学的心理学の研究につながる。脳波研究。脳の構造と機能の研究。(A) 心の科学的研究は、脳の研究に尽きる。(B) 心の研究に、脳の研究は欠かせない。(心 \supset 脳、心 \subset 脳)。必要条件、十分条件。(A) 心を

わかるには脳を分かることが必要である。(B)心をわかるには脳を分かることで十分である。哲学的には、**論理実証主義**でも、**機械論的唯物論**でも。

6) 在る。可知。しかし、可知は自らのここらに限られている。**内観主義心理学**。「自分の心は確かに在り、そのことには、疑う余地はない。そして、心は絶えず働いており、私はそれを知ることができる。そして、人間は自分の心は、このように、内観によって、知ることができる。ただし、他人の心はわからないのだが。」内的世界は外的世界から独立分離している。

(A) 自分の内的世界、意識に上るところを、研究する。それ以外は、頼りない。主観的観念論哲学。Husserlの現象学は、Husserl 自らの意識の解明である。「イデー」「経験と判断」など。研究者自らの心<意識>を研究する。主観的観念論・現象学の一形態。

(B) 被験者に、自分の意識に上るところを報告してもらい、その報告をもとに、被験者の心を研究する。研究者にとっての他者である被験者の心<意識>を研究する。Titchenerの内観心理学。被験者の<内観>の訓練が為された。

7) 在る。可知。「心は在る。外界の構造化の働きとして、情報の処理過程として、モデルとして、知ることができる。」ゲシュタルト心理学。構造化作用として。認知心理学。認知過程・活動、認知構造、内外の情報の処理過程・活動として。コンピュータ・モデル。眼球運動記録装置。現代科学論。システム論。情報理論、サイバネティクス。などなど。

8) 在る。可知。**唯物弁証法的反映論**。「心とは、脳の活動であると同時に、世界の反映である。」心の受動性と能動性が問題となる。反映という受動性を思わせる理解に、能動性を認め、それらを両立させようとして、能動的な「**反映活動**」という考えが現れる。例えば、ルビンスュティン『一般心理学の基礎』『存在と意識』『心理学』『思考心理学』など。まさに、弁証法的唯物論。反映論。

ヴィゴツキー、チェプロフ、レオンチェフ、ルリア、スミルノフ、・・・。

9) 在る。可知。**現象学**。**現象学的心理学**。**現象学的精神病理学**。「心とは意識である。意識は、何事かを志向する。意識とは常に、何事かの意識である。」「ここらには、**意識 (consciousness)** と**気づき (awareness)**がある。」ここでも、心の能動性と受動性が問題となる。志向という能動性の理解に、受動性を認め、それらを両立させようとして、たとえば、「**総合**」という能動的な意識の働きに、「**受動的総合**」という能動性と受動性と両立させる理解に努める。近年は、フッサールの解説により、意識と覚知の区別が焦点化され、自己意識と自己覚知が、主題化されるに到る。「心は、意識 consciousness と覚知 (気づき) awareness であり、意識は志向的 intentional であるが、覚知は志向的ではない。」との理解が知られる (Sahavi,2005)。「他者の心」に如何にして接近できるか (accessibility)、は依然として挑戦すべき大きな謎の一つである。「私と世界」。「人間科学としての心理学」A.Giorgi。現象学・解釈学。デルタイ、ヤスパース、フッサール、ガダマー、メルロ＝ポンティ、サルトル、リクール、・・・。

10) 在り、そして、無い。「心は、・・・のようなものとして、**比喩**によって語る事ができる。」仏教の「**宝積経**」に**多数の比喩**が与えられている。「心についてあまねく観察しようとする勇猛心 (精進)」が、世間を超えた知恵の良薬である。「心は・・・のようなものである。」**無数の**・・・。

11) 実践者としての**教師**や**保育者**、そして**臨床家**、に求められる心理学は、極く、簡潔に言えば、**実践知**。例えば、目の前に居る現実の子どもの身になって、**Perfink (覚考情する)**、何を見て (**知覚**)し、何を感じ、何を考えているかを、直接に直感する、あるいは、生き生きと想像し、共感すること、それが出来ることだ。それ以上でも、それ以下でもない。**健全な常識人・教育実践者たち**。

11) は、1) の常識の世界に直接に繋がるが、しかし、より洗練された立場である、ともいえる。そこでは、すべての立場を動員した、豊かな想像力が尊重される。シャーロック・ホームズの世界。刑事コロンの世界。ドン・キホーテの世界、ユクスキュールの世界、カフカの世界、ヴァージニア・ウルフの世界、ジェームス・ジョイスの「ユリシーズ」の世界、芦田恵之助、武田常夫の授業の世界、夏目漱石の「ここら」の世界、中勘助「銀の匙」の世界、芥川龍之介・黒澤明「羅生門」の世界、・・・。文学芸術の世界、そして、さらに広く、音楽、絵画、彫刻、舞踊などなどの芸術世界、さらに、歴史世界にも広がっている。説明と理解の双方の縦横の駆使、精神医学者・安永浩の世界。

先には「**人間科学としての心理学**」の世界が広がる。「**未来の心理学の世界**」、と吉田は信じている。

それぞれの立場に対応して、それぞれが目指す「心」または「行動」の解明への努力が・・・そして、多種多様な研究方法が創造され、説き尽くせぬ程、無数に集積されて来ている。以上